

法と宗教 (五)

堀 堅 士

目次

第一章	仏法——仏教における「法」
第一節	仏陀の伝記
(1)	系図
(2)	ダビデの子孫
(3)	アダムの子孫
(4)	処女受胎
(5)	胎児占相
(6)	誕生
(7)	幼児占相
(8)	才能
(9)	灌頂の儀式
(10)	ヨルダン河での洗礼
第二節	悪魔の誘惑
(1)	パンと石
(2)	富と神
(3)	足と石
第三節	法の王者
(1)	信仰は種である
(2)	無明の闇を照らす

- (3) 物にとらわれない
- (4) 後をふりむかない
- (5) 法の国に生きる

第四節 湖を渡る奇蹟

第五節 給食の奇蹟

第六節 病氣治療の奇蹟

- (1) メナンドロス大王
- (2) 梵天勸進

第七節 復活の奇蹟

- (1) マリヤと地震
- (2) チャーペーラの塔

第八節 宇宙の原理

- (1) 釈迦の死去
- (2) 法をよりどころとして

第二章 律法——ユダヤ教における「律」

第一節 創世記

- (1) 天地創造
- (2) エデンの園
- (3) ノアの箱舟
- (4) バベルの塔
- (5) ヘブル人
- (i) アブラハム
- (ii) イサク
- (iii) ヤコブ

〔以上第一八卷第三号所載〕

〔以上第一八卷第四号所載〕

〔以上第三四卷第二号所載〕

第二節 出エジプト記

- (1) モーセ
(2) アロン

- (3) イスラエル人

- (4) 十戒

- (5) 角がある人

第三節 レビ記

- (1) 祭司
(2) アザゼルとモレク

[以上第三四卷第六号所載]

[以下次号]

(3) イスラエル人

△イスラエルの人々がエジプトに住んでいた間は、四百三十年であった。四百三十年の終りとなって、ちょうどその日に、主の全軍はエジプトの国を出た。

これは彼らをエジプトの国から導き出すために主が寝ずの番をされた夜であった。ゆえにこの夜、すべてのイスラエルの人々は代々、主のために寝ずの番をしなければならない。▽

(出エジプト記二一—40)

エジプトを出発した△主の軍団▽が「女と子供を除いて、徒歩の男子は約六十万人であった」とすれば(出エジプト記二一—37)、婦女子を入れるとその総数は「百万人」から「二百万人」の間だと推定される。

さて、この「大群衆」の行く先は、△北東▽の——乳と蜜の流れる「カナンの地」なのであるから(出エジプト記一三—5)、彼らは地中海沿いの道△ペリシテ人の地への街道▽か、或はそれより少し内陸に入った隊商の道△シユー

ルの野の道[△]を[△]通[△]つて、真直ぐにその『約束の地』へ向うべきであつた。

しかし、奇怪なことには――彼らは逆に南へ南へと、紅海に沿つてシナイ半島を下つて、行つたのであつた。

△さて、パロが民を去らせた時、ペリシテ人の国の道は近[△]かつたが、神は彼らをそれに導かれなかつた。民が戦いを見れば悔いてエジプトに帰[△]るであらうと、神は思われたからである。神は紅海に沿う荒野の道に、民を回[△]らされた。イスラエルの人々は武装してエジプトの国を出て、上[△]つた。

そのときモーセはヨセフの遺骸を携えていた。[△]

(出エジプト記一三―17)

間もなく「エジプトの王」は、ヘブル奴隸たちをむざむざと立ち去らせたことを後悔し、彼らを取りもどすために、みづから六百台の戦車をひきいて彼らの後を追つて来た。

△パロが近寄つた時、イスラエルの人々は目を上げてエジプトびとが彼らのあとに進んできているのを見て、非常に恐れた。そしてイスラエルの人々は主にむかつて叫び、かつモーセに言つた、「エジプトに墓がないので、荒野で死な[△]せるために、わたしたちを携え出したのですか。なぜわたしたちをエジプトから導き出して、こんなにするのですか。わたしたちがエジプトであな[△]たに告げて、『わたしたちを捨てておいて、エジプトびとに仕えさせてください』と言つたのは、このことではありませんか。荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかつたのです。」[△]

(出エジプト記一四―10)

奴隸根性を捨て切れないでいたヘブル人たちは、早くもエジプトから脱出したことを後悔し始めていた。

彼らは王の軍隊の前で恐れおののき、ここで殺されるよりは王の奴隸であつたほうがずっとよかつたのにと、嘆き悲しんだのである。

それを見た「神」は、紅海（葦の海）の水を分けて、ヘブル人たちだけを渡らせるといふ「奇蹟」を演じた。

／＼モーセが、手を海の上にさしのべたので、主は、夜もすがら強い東風をもって海を退かせ、海を陸地とされ、水は分れた。イスラエルの人々は、海の中のかわいた地を行ったが、水は彼らの右と左に垣となった。エジプトびとは追って来て、パロのすべての馬と戦車と騎兵とは、彼らの後について、海の中にはいった。暁の更に、主は、火と雲の柱のうちからエジプトびとの軍勢を見おろして、エジプトびとの軍勢を乱し、その戦車の輪をきしらせて、進むのを重くされたので、エジプトびとは言った、「われわれは、イスラエルを離れて逃げよう。主が彼らのためにエジプトびとと戦う。」

その時、主は、モーセに言われた、「あなたの手を海の上にさしのべて、水をエジプトびととその戦車と騎兵との上に流れ返らせなさい。」

モーセが手を海の上にさしのべると、夜明けになって海はいつもの流れに返り、エジプトびとはこれに向って逃げたが、主はエジプトびとを海の中に投げ込まれた。▽

(出エジプト記一四—21)

そこで、モーセと、ヘブル人たちは、その「神」を讃美して歌った。

／＼あなたが息を吹かれると、海は彼らをおおい、

彼らは鉛のように、大水の中に沈んだ。主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、

だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、

ほむべくして恐るべきもの、

くすしきわざを行うものであろうか。▽

(出エジプト記一五—10)

ここで、モーセと、ヘブル人たちは、その「神」を、「神々」の中で一番すぐれた「神」（エル）であるとして讃美している。

モーセも、ヘブル人たちも、「一神教徒」ではなかった。彼らは「拝一神教徒」であつたのであり、「神」がただ一人だけだなどとは、決して考えていなかったのである。

△パロの馬が、その戦車および騎兵と共に海にはいると、主は海の水を彼らの上に流れ返らされたが、イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行つた。

そのとき、アロンの姉、女預言者、ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちも皆タンバリンを取つて、踊りながら、そのあとに従つて出てきた。そこでミリアムは彼らに和して歌つた、

「主にむかつて歌え、

彼は輝かしくも勝ちを得られた、彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。」▽

（出エジプト記一五―19）

さて、ここでもまた、突如として、「ミリアム」なる重要人物が登場する。彼女はアロンの「姉」であり、しかも、「女預言者」なのであつた。

「預言者」というのは、神がかり状態になつて、『神の託宣を語る者』のことであるが、男尊女卑の思想が満ち満ちているこの聖典の中で、女性が「預言者」△神の口と共にある者▽『神が依つて語る者』であつたとされているのであるから、ミリアムは何か特別に重要な役割を果していたに違いない。

△イスラエルの人々の全会衆はエリムを出発し、エジプトの地を出て二か月目の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野にきたが、その荒野でイスラエルの人々の全会衆は、モーセとアロンにつぶやいた。イ

スラエルの人々は彼らに言った、「われわれはエジプトの地で、肉のなべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べていた時に、主の手にかかって死んでいたら良かった。あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出して、全会衆を餓死させようとしている。」▽
（出エジプト記一六—一）

そこで、「神」はその「奇蹟力」によって、夕べには「うずら」を天から降らせ、朝には「パン」（「マナ」）を天から降らせて、彼らを餓死から救い出した。「イスラエルの人々は、人の住む地に着くまで四十年間、このマナを食べた。すなわち、彼らがカナンの地の境に到着するまで四十年間、マナを食べた」（出エジプト記一六—35）。

イスラエルの人々の全会衆は、主の命に従って、シンの荒野を出発し、旅路を重ねてレピデムに宿営したが、そこには民の飲む水がなかった。

それで、民はモーセと争って言った、「わたしたちに飲む水をください。」

モーセは彼らに言った、「あなたがたはなぜわたしと争うのか、なぜ主を試みるのか。」

民はその所で水にかわき、モーセにつぶやいて言った、「あなたはなぜわたしたちをエジプトから導き出して、わたしたちを、子供や家畜と一緒に、かわきによって死なせようとするのですか。」

このときモーセは主に叫んで言った、

「わたしの民をどうすればよいのでしょうか。彼らは、今にも、わたしを石で打ち殺そうとしています。」

主はモーセに言われた、「あなたは民の前に進み行き、イスラエルの長老たちを伴い、あなたがナイル川を打ったつえを手にとって行きなさい。見よ、わたしはハイブの岩の上であなたの前に立つであろう。あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て、民はそれを飲むことができる。」

モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのように行った。そして彼はその所の名をマッサ、またメリ
バと呼んだ。これはイスラエルの人々が争ったゆえ、また彼らが「主はわたしたちのうちにおられるかどうか」と言つて主を試みたからである。▽

(出エジプト記一七—一)

このようにして、「ホレブ山」の岩の上に現れた神の「奇蹟」によって、彼らは「水」を手に入れたが、しかし、
彼らの前には、まだ恐るべき「敵」が待っていた。

異邦人(異教徒) アマレク人が彼らに襲いかかったのである。

△ときにアマレクがきて、イスラエルとレビデムで戦った。モーセはヨシヤに言った、「われわれのために
人を選び、出てアマレクと戦いなさい。わたしはあす神のつえを取つて、丘の頂に立つであらう。」

ヨシヤはモーセが彼に言つたようにし、アマレクと戦った。モーセとアロンおよびホルは丘の頂に登った。
モーセが手を上げているとイスラエルが勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。

しかしモーセの手が重くなったので、アロンとホルが石を取つて、モーセの足もとに置くと、彼はその上に
座した。そして、ひとりはこちらに、ひとりはこちらにいて、モーセの手をささえたので、彼の手は日没まで
さがらなかった。

(出エジプト記一七—8)

ここに、「ヨシヤ」なる人物が登場し、△ヤコブ一家▽の先頭に立つて勇敢に戦っている。

また「ホル」なる人物も登場して、アロンと肩を並べている。

しかし、実は「ヨシヤ」という名の人物は、その当時はいなかったはずである。何故ならモーセが彼を「ヨシヤ

ア」と名づけたのはずっと後のことなのであるから(民数記一三―16)。

また、アロンと肩を並べるもう一人の人物「ホル」。

彼は、もう一度、現れてアロンと肩を並べた後、永久に聖典の中から消え去ってしまう不思議な人物なのである(出エジプト記二四―14)。

さて、ヘブル人たちの△軍団▽が、このような苦難を乗り越え乗り越えて、向って行く「ミデヤンの地」には――
勿論、あの「モーセの父」――「祭司」エテロが待っていた。

△モーセのしゅうと、ミデヤンの祭司エテロは、神がモーセと、み民イスラエルとにされたすべての事、主がイスラエルをエジプトから導き出されたことを聞いた。

それでモーセのしゅうと、エテロは、さきに送り返されていたモーセの妻チッボラと、そのふたりの子とを連れてきた。

そのひとりの名はゲルショムといった。モーセが、「わたしは外国で寄留者となっている」と言ったからである。ほかのひとりの名はエリエゼルといった。「わたしの父の神はわたしの助けであって、バロのつるぎからわたしを救われた」と言ったからである。

こうしてモーセのしゅうと、エテロは、モーセの妻子を伴って、荒野に行き、神の山に宿営しているモーセの所をきた。

その時、ある人がモーセに言った、「ごらんなさい。あなたのしゅうと、エテロは、あなたの妻とそのふたりの子連れて、あなたの所にこられます。」

そこでモーセはしゅうとを出迎えて、身をかがめ、彼に口づけして、互に安否を問ひ、共に天幕にはいった。√
(出エジプト記一八—一)

ここで、次男の「エリエゼル」の名に関連してモーセが、「わたしの父の神がわたしを助けた」と言っていることは重要である。

モーセの「神」は、「モーセの父」であるケニ人の祭司「エテロ」の守護神であったのである。

そして、そのエテロの手で『イスラエル』という名称の一つの「宗教団体」が結成されたのであった。——或は、エテロの下に結成されていた宗教団体『イスラエル』の信徒の中へ、エジプトから脱出して来たヘブル人たちが新たに加したのだと見るべきであるかも知れない。

この『イスラエル』というのは、「神^{エル}の支配する宗教団体」＝「エル信仰集団」を意味しており、この宗教結社に属する人を『イスラエル人』と呼んだのである。

ヘブル人の中でその宗教結社に属する者だけが『イスラエル人』なのである。

彼らは、「血統」によれば「アラム人」であり、宗教上の概念として『イスラエル人』なのであった。

そして、『イスラエル』というこの名称は、——前述のように——△アラムの草原√(パダンアラム)(創世記二五—20)で発見された『エブラ文書』によって考古学的にその存在が確認された「個人」又は「集団」の名称であり、それは「人」(創世記三二—24)又は「神」(創世記三五—10)によってヤコブに与えられた名であり、更に——エジプトで発見された『イスラエル碑文』によって、それが「集団」の名称として確認されているものなのである。

△エテロは言った、「主はほむべきかな。主はあなたがたをエジプトびとの手と、パロの手から救い出し、民

をエジプトびとの手の下から救い出された。今こそわたしは知った。実に彼らはイスラエルびとにむかって高慢にふるまったが、主はあらゆる神々にまさって大いにましますことを。」

そしてモーセのしゅうとエテロは燔祭と犠牲を神に供え、アロンとイスラエルの長老たちもみなきて、モーセのしゅうとと共に神の前で食事をした。▽
(出エジプト記一八—10)

これは、その日以後、この「ケニ人の神」・「モーセの父の神」・「エテロの神」が「アロンの神」となり、「ヘブルの長老たちの神」となり、エジプトから脱出して来たすべてのヘブル人たちの神となるための儀式なのであった。——しかもここで、祭司エテロが「主は、あらゆる神々にまさって大いにまします」と述べていることは、非常に重要なことなのである。

エテロの神である『イスラエルの神』は、「他の神々」(エロヒム)の存在を承認する拝一神教の神であり、『ユダの神』である絶対唯一神ヤハウへではなかった。

今日なお、「イスラエル」と「ユダ」とが混同されている。

しかし、「エル信仰集団」(イスラエル)——拝一神教の結社——と、「ヤハウハ信仰集団」(ユダ)——一神教の結社——とは完全に異質の宗教団体なのである。

このように、「モーセの父の神」が「あらゆる神々にまさって大いなる神」として礼拝されていることに大いに戸惑って、各種の聖書学者たちは、或は「ヤハウハも本来は拝一神教の神であった」とか、「ヤハウハはエルである」とか、「ヤハウハも、元来はホレブ山と結合した一地方神であった」とか、「ヤハウハもまた、エル・シャダイの一種であったのだ」などと説明している。

しかし、そのように、その初めには「拝一神教」の神であった「ヤハウハ」が、途中で、「一神教」の神「ヤハウハ」に変身したというような宗教観は不純であり、一貫性がない。

エテロとモーセは、実は「ヤハウハ」を知らなかったのだと判断せざるを得ない。

モーセの「主なる神」自身が、モーセに告げて言っている、「これは主の超越である。その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国にある人と獣との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。わたしは主である」(出エジプト記二一―11)。

ここで、「これは主の超越である」「わたしは主である」の「主」には、「ヤハウハ」というヘブル語が当てられているが、それではユダヤ教の絶対唯一神「ヤハウハ」が、他のエジプトの「神々」の「存在」を承認していたということになる。

また、モーセ自身がイスラエル人たちに向って次のように言っている、「あなたがたの神である主は、――イスラエルの神である主は、――神の中の神、主の中の主、大いにして力ある恐るべき神である」(申命記一〇―17)。

このように、他の神々の「存在」を承認するモーセの「主」なる神が、「ヤハウハ」であるはずがない。――モーセの神が、「ヤハウハ」であったとしたのは実は、後世の作為なのである。

(4) 十戒

「モーセはしゅうとの言葉に従い、すべて言われたようにした。すなわち、モーセはすべてのイスラエルのうちから有能な人を選んで、民の上に長として立て、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長とした。平素

は彼らが民をさばき、むずかしい事件はモーセに持ってきたが、小さい事件はすべて彼らみずからさばいた。こうしてモーセはしゅうとを送り返したので、その国に帰って行った。▽
(出エジプト記一八―24)

このように、モーセが「父」エテロの指示に従い、「すべて言われたようにした」というのなら、『七つの顔』を持つというこのミデヤンの地の祭司が、実は、ヘブル人たちのエジプト脱出のすべてを企画したのだという推理も可能である。

そのエテロは、国へ帰って行ったとしても、その子のホバブは、その後もモーセと行動を共にしていたのである
(民数記一〇―29)。

△主はモーセに言われた、「あなたの民のところへ行つて、きょうとあす、彼らをきよめ、彼らにその衣服を洗わせ、三日目までに備えさせなさい。三日目に主が、すべての民の目の前で、シナイ山に下るからである。あなたの民のために、周囲に境を設けて言いなさい、『あなたがたは注意して、山に上らず、また、その境界に触れないようにしなさい。山に触れる者は必ず殺されるであろう。手をそれに触れてはならない。触れる者は必ず石で打ち殺されるか、射殺されるであろう。獣でも人でも生きることとはできない。』ラッパが長く響いた時、彼らは山に登ることができると。」

そこでモーセは山から民のところを下り、民をきよめた。彼らはその衣服を洗った。モーセは民に言った、「三日目までに備えをしなさい。女に近づいてはならない。」▽
(出エジプト記一九―10)

「神の山」の名が、ここで急に「ホレブ山」から「シナイ山」に変っているが、それは、この山が〔E資料〕と〔D資料〕では「ホレブ山」とされ、〔J資料〕と〔P資料〕では「シナイ山」となっているからである。

なお、ここで「民」というのは、△アダム▽「男」だけを意味している。

モーセは、その「男」たちに三日間、「女色」を断つて身を清めよと命令したのであった。

△三日目の朝となって、かみなりと、いなずまと厚い雲とが山の上にあり、ラッパの音がはなだ高く響いたので、宿営における民は、みな震えた。

モーセが民を神に会わせるために、宿営から導き出したので、彼らは山のふもとに立った。

シナイ山は全山煙った。主が火の中であつて、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた。ラッパの音がいよいよ高くなつたとき、モーセは語り、神は、かみなりをもつて彼に答えられた。

主はシナイ山の頂に下られた。そして主がモーセを山の頂に召されたので、モーセは登つた。主はモーセに言われた、「下って行つて民を戒めなさい。民が押し破つて、主のところいきで、見ようとし、多くのものが死ぬことのないようにするためである。主にちかづく祭司たちにもまた、その身をきよめさせなさい。主が彼らを打つことのないようにするためである。」▽
(出エジプト記一九一六)

ラッパの音が高く長く響いて、雷鳴がとどろき、稲妻が走つた。

「あの雷鳴が主の声だとしても、その御姿を見るまでは信じられない」と言つて、ヘブル人たちがその山の上へ登つて来ることを「主」は極度に警戒している。

しかし、「主の御姿を見よう」としてヘブル人たちがその山の上まで登つて来たとしても、ほんとうにそれが「神」ならその「奇蹟力」によって身を隠すことは容易なはずである。「人間に見られて困るのなら、それは人間なのでは

ないか。山の上でラッパを吹いているのは「エテロ」か、「ホバブ」なのではないか。」

「神はこのすべての言葉を語って言われた。」

「わたしは、あなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。

あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。

それに仕えてはならない。

あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎む者には、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、恵みを施して千代に至るであろう。

あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰ししないでは置かないであろう。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門の内にいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

あなたの父と母とを敬え。これはあなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。

あなたは殺してはならない。

あなたは姦淫してはならない。

あなたは盗んではならない。

あなたは隣人について、偽証してはならない。

あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。』▽
(出エジプト記二〇—一)

各種の聖書学者たちは、『モーセ五書』(創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記)の中に合計六百十三種類の「戒律」が含まれているとし、それを更に『義務的戒律』二百四十八種類と、『禁止的戒律』三百六十五種類とに分類している。

そして、『義務的戒律』を、更に次の十八種類の戒律に分類するのが通説となっている。

「神について」(九戒律)、「律法について」(十戒律)、「神殿と祭司について」(十九戒律)、「犠牲について」(五十三戒律)、「誓願について」(四戒律)、「清潔について」(十八戒律)、「奉納について」(二十戒律)、「安息年について」(九戒律)、「食用動物について」(十一戒律)、「祝祭日について」(十七戒律)、「共同体について」(十四戒律)、「偶像について」(五戒律)、「戦争について」(四戒律)、「社会について」(十五戒律)、「家族について」(十五戒律)、「裁判について」(八戒律)、「奴隷について」(四戒律)、「不法行為について」(十三戒律)。

また、『禁止的戒律』を、更に次の十三種類の戒律に分類するのが通説となっている。

「偶像崇拜について」(四十五戒律)、「歴史的事件について」(十四戒律)、「神を瀆すことについて」(七戒律)、「神殿について」(二十二戒律)、「犠牲について」(六十九戒律)、「祭司について」(十四戒律)、「適正な食物に

ついて」(三十戒律)、「ナジル人について」(八戒律)、「農業について」(二十戒律)、「商取引および奴隷について」(四十三戒律)、「裁判について」(五十七戒律)、「性関係について」(三十二戒律)、「王制について」(四戒律)。さて、この分類方法には異論がないわけではないが、『モーセ五書』の中で最も重要なものは、次の十項目であるという点では、すべての聖書学者たちの意見は一致している。

- ① わたしの他に何ものをも神としてはならない。
- ② 自分のために刻んだ像を造ってはならない。
- ③ 主の名をみだりに唱えてはならない。
- ④ 安息日を忘れてはならない。
- ⑤ 父と母を敬わなければならない。
- ⑥ 殺してはならない。
- ⑦ 姦淫してはならない。
- ⑧ 盗んではならない。
- ⑨ 隣人について偽証してはならない。
- ⑩ 隣人の家をむさぼってはならない。

この十項目の戒律がユダヤ教における「律法」の中心であり、また現代の西洋文明における「法律」の根本でもあるとされているところの『モーセの十戒』である。

「民は皆、かみなりといなづまとラッパの音と山の煙っているのを見た。民は恐れおののき、遠く離れて立

った。

彼らは、モーセに言った、「あなたがわたしたちに語って下さい。わたしたちは聞き従います。

神がわたしたちに語られぬようにして下さい。

それでなければ、わたしたちは死ぬでしょう。」▽

(出エジプト記二〇—18)

「ここで神との契約が結ばれるのだ」と言われてみても、ヘブル人たちにとっては、その神の「姿」を見ることは許されず、またその「声」というのは、ただ耳をつんざく「雷鳴」だけであり、神の言葉などは彼らにはわからなかった。

そこで、彼らは耳をおおって立ちすくみ、恐れおののきながらモーセに頼んだ、「神が直接わたしたちに語られぬようにして下さい」「あなただけが神の言葉を聞いて、それをわたしたちに伝えて下さい」「わたしたちはあなたの声を聞いて従います。」

△民は遠く離れて立つたが、モーセは神のおられる濃い雲に近づいて行つた。主はモーセに言われた、「あなたはイスラエルの人々にこう言いなさい、『あなたがたは、わたしが天からあなたがたと語るのを見た。あなたがたはわたしと並べて、何を造ってはならない。銀の神々も、金の神々も、あなたがたのために、造ってはならない。……(中略)……わたしは紅海からペリシテびとの海に至るまでと、荒野からユフラテ川に至るまでを、あなたの領域とし、この地に住んでいる者をあなたの手にわたすであらう。あなたは彼らをあなたの前から追い払うであらう。あなたは彼ら、および彼らの神々と契約を結んではならない。彼らがあなたをいざなう、わたしに対して罪を犯させることのないためである。もし、あなたが彼らの神に仕えるならば、それ

は必ずあなたのわなとなるであろう。』

(出エジプト記二〇—21)

この「あなたがたは、わたしと並べて、何をも造ってはならない。銀の神々も、金の神々も、あなたがたのために造ってはならない」(出エジプト記二〇—23)から始って、「もしも、あなたが彼らの神に仕えるならば、それは必ずあなたのわなとなるであろう」(出エジプト記二三—33)に終る部分が、『契約の書』とも、「血の契約」とも呼ばれている部分である。

イスラエルの「主」が、イスラエルの「民」に向って、「おまえたちが、これらの戒律を忠実に守るならば、わたしは、おまえたちにあの乳と蜜の流れる／＼カナン之地を与える」と言い、イスラエルの「民」が、「わたしたちは、その戒律を忠実に守りますから、わたしたちにその土地を下さい」と答えて、ここに「主」と「民」との間に血の契約が成立したというのである。

しかし、「契約」というものは、相対的なものである。

その契約の双方の当事者によってそれは遵守されなければならない。

その意味で、「絶対的な神」と「相対的な人間」との間の「契約」というものは、成り立つはずがない。

しかし、ここではともかくにも、イスラエルの「神」が契約の相手として、イスラエルの「民」を選んだのであり、換言すれば、その「民」が契約の相手として、その「神」を選んだのであった。

／＼モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。

民はみな同音に答えて言った、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います。」

そしてモーセは主の言葉を、ことごとく書きしるし、朝はやく起きて山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの

十二部族に従って十二の柱を建て、イスラエルの人々のうちの若者たちをつかわして、主に燔祭をささげさせ、また酬恩祭として雄牛をささげさせた。

その時モーセはその血の半ばを取って、鉢に入れ、また、その血の半ばを祭壇に注ぎかけた。

そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼らは答えて言った、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います。」

そこでモーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った、「見よ、これは主がこれらのすべての言葉に基いて、あなたがたと結ばれる契約の血である。」▽
(出エジプト記二四—3)

さて、その『契約の書』の内容が、「あなたがたはわたしと並べて、何をも造ってならない。銀の神々も、金の神も、あなたがたのために、造ってはならない」から始めて、「もし、あなたが彼らの神に仕えるならば、それは必ずあなたのわなとなるであろう」で終わっていることからわかるように、それは、主として祭儀関係の「律法」であり、そして、これらの祭儀関係の「律法」は、明らかに、ユダヤ教独特のものである。

しかも、——不思議なことには、——これらの祭儀関係の律法のほとんどが日本の古神道の律法に酷似しているのである。山の周囲にめぐらす△標繩▽や、△磐境▽や、契約のための△血盟▽までも。

「日本においては塩は汚れを清めるものである。しかし何故、塩が清浄さを意味するかということはわからない。いろいろな儀式の際に塩をまくことで、日本人はその場所を清めたと信じている。国技館で行なわれる相撲も取組む前にお互いの力士は塩をまいて土俵を清めるし、料理屋では客の来る前に小さな塩の山を作って入口を清める。また、日本人は葬式に行った後で、穢れを除くために自分の身体に塩を掛ける。このような塩と清めの関係について、何か

古代ユダヤ文化においても同じ習慣があったと聞いているが、これについてのあなたの御意見はどうですか」という質問に対して、かのユダヤ教の「ラビ」／＼律法学者は次のように回答している。「日本の大臣がイスラエルの首都を訪れたようなとき、イスラエル国家の重要メンバーは、日本の大臣を歓迎するために、そのしるしとして彼に塩と一個のパンを与える習慣がある。このように尊敬すべき訪問者には、一つかみの塩を与えるという習慣は古代ユダヤの歴史において昔から認められた伝統なのである」〔M・トケイヤー著・箱崎総一訳「ユダヤと日本・謎の古代史」(一九七五年・産業能率大学出版部)二九頁〕。

ユダヤ教の聖典に「あなたの素祭に、あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて、あなたの供え物は、塩を添えてささげなければならない」(レビ記二一13)と書いてあるように、日本の古神道でも、また常にその神前に「塩」を捧げるのである。

また、「現在でも東北地方へ行けば、どの農家でも沢山のお守り札を家の入口や台所に張りつけている。これは古代ユダヤ人の行ったアミユレット使用の習慣と非常に類似したものだと思うが、これについてのあなたの御意見はどうですか」という質問に対して、彼は「ユダヤ人は、どの家庭の入り口にもメズザと呼ぶお守り札を張りつけておく。これは一種の神秘的な魔よけである。現在でもメズザは多くのユダヤの家庭で用いられており、これは羊の皮で作られた薄い紙であり、それには旧約聖書からの言葉が書きつけられている。このヘブライ語のメズザという言葉は、「玄関のドア」という意味である。だから、ユダヤ人の家の入口の右の方には、二行に分けられた文字の書きつけられた小さな羊皮紙が張りつけられているのである。これはキリスト教徒においては絶対に発見できない習慣である。東京の私の事務所には、そのメズザがたくさんある」と回答している〔同書三五頁〕。

しかも、そのような「お守り札」（護符）は、実は東北地方ばかりではなく、伊勢地方ではあの「伊雑宮」を中心にして、また京都地方では「八坂神社」を中心にして配布され、家々の戸口に張りつけられているのである。

そして、それらの護符（神符）の多くには「蘇民将来子孫門」という文字とあの「ダビデの星」☆とが書かれている。なお、柳の木を削って小さな六角形の塔を造り、それに「ダビデの星」☆と「蘇民将来子孫宿」という文字とを書き入れた護符もある。

かのユダヤ教の「ラビ」△律法学者▽は更に言葉をつづけて次のように述べている。

「お守りをつける習慣は、正統的なユダヤ学者によっては、いつの時代にもそれは迷信であるということと禁止されていた」「しかし、われわれユダヤの民衆は、常に何かを信じたがっているので、この魔術を含んだ一枚の守り札を信ずる迷信的傾向は存在している。ここでもっと思い出すのは、日本にも牛の像をあがめる宗派があるが、これは古代ユダヤ人たちの周辺に住んだ人たちの行った古い偶像崇拜と非常によく似ていることである。当時黄金で作られた牛の像が崇拜されていた。また、イスラエルの神殿の北の部分には、黄金の二つの牛の像が祭られていたことも事実である」〔同書三六頁〕。

また、「過越しの祭の時、ユダヤ人の家庭はその入り口に赤い印をつける。日本の神社もまた、朱色で塗られているものが多い。特に古い神社はそうである。鳥居もまた赤く塗られている。そこに何かユダヤ教との間の類似点が認められるように思うが、これについてのあなたの御意見はどうですか」という質問に対して、彼は「私も同じように感じている。古代ユダヤの民は、天幕を作っていた。それはユダヤ民族がイスラエルの地に到着する以前においても行われていたのである。この古代ユダヤ人によって作られた移動可能な神社の内部は、常に赤い色で覆われていたの

である」「おそらくそれは偶然の一致ではなかったのかもしれない」と回答している〔同書三九頁〕。

また、ユダヤ教の聖典に、「あなたは階段によって、わたしの祭壇に登ってはならない。あなたの隠し所が、その上にあらわれることのないようにするためである」(出エジプト記二〇—26)とあるのと全く同様に、伊勢神宮や出雲大社の奥の神殿に至るには、「斜めに傾いた廊下」を登って行くようになっていいるという点をも彼は指摘している〔同書四〇頁〕。

また、彼は、「日本の神社へ行って気づくことは、日本の神官は袖に長いひもをつけている。私が神官にその理由について尋ねたとき、彼は単に『それは伝統に従っているにすぎない』と答えてくれた。しかしおもしろいことは、このように袖に房をつけておくというのは、非常に古いユダヤ僧侶の習慣なのであり、それは優に三千年以上もの昔から存在していた古代ユダヤの習慣なのである」とも述べている〔同書四五頁〕。

更に、彼は、日本の神社の前に立っている狛犬(唐獅子)が、古代ユダヤの神殿の前に立てられていた「ライオン」の像に類似していることをも肯定し〔同書四七頁〕、「生後三十日目に赤ん坊を神社に初詣させる習慣は、日本とユダヤの両方に見られるものだと思うが、これについてのあなたの御意見はどうですか」という質問に対して、「それはユダヤ教においては、子供の贖罪と呼ばれる儀式である。ただし、ユダヤ教におけるこの儀式は、男の子だけに對して行なわれるものである」と回答している〔同書四九頁〕。実は、これは日本においても、(最近まで)男の子に對してだけ行なわれる習慣だったのである。

また、ユダヤ教には「塩」による清めの他に、「水」による清めがあることを指摘し、「禊」(みそぎ)について、彼は次のように述べている。「ヘブライ語でミクバと呼ばれるミソギは、自然水によって身体を清める宗教的な儀式

である」「女性は毎月月経が終った時にこうしたミクバの儀式を行なって身を清めるのである。また、男性は祭りの前にミクバを行ない、祭りをむかえる心理的な準備をするのである。ユダヤ人以外の民族、特にキリスト教徒たちは、このような習慣については全く理解することができない」〔同書五〇頁〕。

そして、更に、彼は「山伏の兜巾」に関連して、次のようにも述べている。「山伏がもし変形したユダヤ教徒であったとしたならば、それはどの時代のユダヤ人であったのだろうか。山伏は山岳信仰者であるが、山の頂を聖なる場所とするユダヤ教の考え方は、最も古代のユダヤ教の伝統に属するものである。古代ユダヤ人たちは山を非常に宗教的意味をもって崇拜していた」「天狗や山伏がその額につけていたという兜巾は、古代ユダヤ教の習慣にあるヒラクティリーと大変よく似ている。そして興味深いことは、シルクロードのどの地帯をみても、このような習慣はどこにも認められないという事実である」「さらに、山伏の吹くホラ貝の起源がどこにあるかということも、私にとっては非常に深い興味のあることである。なぜかといえば、ユダヤ人が祭りのときに吹く羊の角で作ったショーファーと呼ばれるのも、また山と関係のある起源を持っているからである。これは旧約聖書創世記の第二十二章にその起源について述べられている。話の終わりで次のように述べられている。『アブラハムは、その子イザクを祭壇のたぎぎの上に乘せて神に犠牲としてささげようとしたとき、アブラハムが目を上げて見ると、うしろに角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその羊を捕え、それをその子の代わりに燔祭としてささげた。』そこでユダヤ人は、毎年の正月、ヤギまたは羊の角で作った吹奏器を鳴らして、その正月の祭りを祝うことになったのである。つまり山伏もヒラクティリーをつけ、山の信仰をもち、ホラ貝を吹く、これはまさにアブラハムの物語とほぼ完全に一致するものであるとも考えられるわけである」〔同書五二頁〕。

「アブラハム一家は、山岳神道の信者であった」と前述したのは、まさにこのことなのであり、「アブラハムが『わが主よ』と呼びかけている場合の『主』は、まるで木蔭の茶屋の男が『旦那』と呼びかけるのと全く同じように、『アドーナーイ』という語を『御主人』という意味で使っているのである」と前述したのも、そのことなのである。

『旦那山伏』という言葉があり、また伊勢神宮の「御師」たちが、御幣をかつぎ「神宮曆」を持って毎年廻って行く先々は『旦那』と呼ばれている。

そして、この「旦那」（檀那）という言葉の語源は、サンスクリット語（梵語）の「ダーナ」（布施）、又は「ダーナ・パティ」（財物を施与する信徒）（施主）であるとするのが通説であるが、「排仏毀釈」の氣風の強い伊勢神宮の「御師」たちが、そのような「仏教用語」を慣習として使用するはずがない。

実は、この「旦那」は、ヘブル語の「アドーナーイ」に由来し、また、「御師」は、「有能な人を選んで、民の上に長として立て」（出エジプト記一八—二五）という場合の「長」（おさ）に相当する *mešar* (*mosh*) に由来するものであると推定される。

『日本書記』の中に明らかにヘブル語が含まれているのである。

△是の時に適りて、昼の暗きこと夜の如くにて、已に多くの日を経たり。時人、常夜行くと曰ふ。皇后、紀直の祖豊耳に問ひて曰はく、是の恠は何の由ぞと。時に一老父有りて曰さく、伝に聞く、かかる恠をば阿豆那比の罪と謂ふと。何の謂ぞと問ひたまふに、対へて曰さく、二社の祝者、共に合葬むるか。因りて推問はしむ。巷里に一人有りて曰はく、小竹祝と天野祝と共に善友たり。小竹祝、逢病して死りぬ。天野祝、血泣ちて曰はく、吾、生けりしとき交友為り。何ぞ死にても穴を同じくすること無からむやと。則ち屍の

側^{かたわら}に伏^{うつ}して自^{みづか}ら死^しりぬ。仍^{なほ}りて合^あせ葬^{むす}む。蓋^{けだ}し是^これかと。乃^{すなは}ち墓^{はか}を開^{ひら}きて視^みるに実^{まこと}なり。故^かれ更^{さら}に棺^{ひつぎ}槨^{あた}を改^{あらた}めて、各^{おのづから}處^{ところ}を異^{こと}にして埋^うむ。則^{すなは}ち日^ひ暉^{ひかり}炳^ひ燦^{さん}りて、日^ひ夜^よ別^{わか}れ有^あり。▽

(日本書記・第九卷)

この「阿豆那比罪」というのは、「アドナヒノツミ」と読むべきであり、「アドーナイ」(主)に対するあの罪「ソドムの罪」(男色罪)のことなのである。

そして、「罪」というその言葉でさえも、それがヘブル語の *zayin* (zimah) (ヨブ記三—11) から来ていると推定されるのである。

さて、それらの——日本の古神道に共通の——「祭儀関係」の律法以外のユダヤ教の律法のほとんどがヘメソポタミヤVに由来するものであることも明らかである。「ユダヤ教の「神話」や「族長物語」がそうであったように。」

「カナン人」というのは、広義では、「カナンの地に住んでいる人」という意味であるが、狭義では、主としてその内の「アモリ人」を指している。

その「アモリ人」というのは紀元前三千年頃メソポタミヤの地に侵入したとされており、バビロニアの第一王朝である「アモリ王朝」は彼らの手で樹立されたのである。

そして、そのアモリ王朝の第六代目の王「ハムラビ大王」(在位 B.C. 1793-1763) が制定し、一九〇二年にスサで発掘された『ハムラビ法典』と、『モーセの律法』とを引きくらべて見る者は誰でも、前者の後者に対する決定的な影響を否定することは出来ない。

例えば、「あなたがヘブルびとである奴隷を買う時は、六年のあいだ仕えさせ、七年目には無償で自由の身として去らせなければならない」という律法(出エジプト記二—2)は、『ハムラビ法典』の第一百七条に酷似している。

但し後者では期限は「三年間」である。

また、「人を撃つて死なせた者は、必ず殺されねばならない。しかし、人がたくむことをしないのに、神が彼の手に人をわたされることのある時は、わたしはあなたのために、一つの所を定めよう。彼はその所へのがれることができる。しかし人がもし、ことさらにその隣人を欺いて殺す時は、その者をわたしの祭壇からでも、捕えて行って殺さねばならない」という殺人における「故意」「過失」についての律法(出エジプト記二一—二二)は、『ハムラビ法典』の第二百六条と第二百七条に酷似している。但し、後者には「逃れの町」へ駆け込み寺の規定がない。

△こうしてモーセはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人の長老たちと共にのぼって行った。そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るおおぞらのようであった。

神はイスラエルの人々の指導者たちを手にかけれなかったので、彼らは神を見て、飲み食いした。

ときに主はモーセに言われた、「山に登り、わたしの所にきて、そこにいなさい。彼らを教えるために、わたしが律法と戒めとを書きしめた石の板をあなたに授けるであろう。」

そこでモーセは従者ヨシユアと共に立ちあがり、モーセは神の山に登った。

彼は長老たちに言った、「わたしたちがあなたがたの所に帰って来るまで、ここに待っていなさい。見よ、アロンとホルとが、あなたがたと共にいるから、事ある者は、だれでも彼らの所へ行きなさい。」△

(出エジプト記二四—二五)

さて、『誰が神を見たのか』『誰が神と語ったのか』は宗教結社にとっては決定的に重要なことであるので、この

あたりには後世の作為が入り乱れているが、結局のところ山の上で「神」に会ったのはモーセだけなのであった。

△こうしてモーセは山に登ったが、雲は山をおおっていた。主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日のあいだ、山をおおっていたが、七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。主の栄光は山の頂で、燃える火のようにイスラエルの人々の目に見えたが、モーセは雲の中にはいって、山に登った。

そしてモーセは四十日四十夜、山にいた。▽

(出エジプト記二四―15)

その山の上で、神は重ねて祭儀、関係の律法をモーセに示した(出エジプト記二五―1)。

そして、これらもろもろの『律法』が二枚の石板に書き留められることになった。

△主はシナイ山でモーセに語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち神が指をもって書かれた石の板をモーセに授けられた。▽

(出エジプト記三一―18)

イスラエルの「神」がその指で書いたこの二枚の石板が「神」とその「民」との間の『契約証明書』なのであった。この二枚の石板△あかしの板▽こそ、「カナン」の地」が「イスラエル人」の所有物であるという唯一の証拠なのであった。

△民はモーセが山を下ることのおそいを見て、アロンのもとに集って言った、「さあ、わたしたちに先立って行く神をわたしたちのために造って下さい。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセはどうなったのかわからないからです。」

アロンは彼らに言った、「あなたがたの妻、むすこ、娘たちの金の耳輪をはずして、わたしの所に持ってきてなさい。」

そこで民はみなその金の耳輪をはずしてアロンのもとに持ってきた。アロンがこれを彼らの手から受け取り、工具で型を造り、鑄て子牛としたので、彼らは言った、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」。

アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そしてアロンは布告して言った、「明日は主の祭である」。

そこで人々は、あくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲みし、立って戯れた。▽
(出エジプト記三二—1)

このように、イスラエルの「民」は長老アロンを先頭に立てて、早くもその「主」に対して叛逆をくわだてていた。彼らはすでに「主」との「契約」を破棄していたのである。

彼らは、『新しい主』へ新しい契約の相手▽として『金の子牛』を選んでいたのである。

△主はモーセに言われた、「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。彼らは、早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鑄物の子牛を造り、これを拝み、これに犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトから導きのぼったあなたの神である』と言っている。▽
(出エジプト記三二—7)

何たることか、切角、「神」から契約の相手として選ばれたイスラエルの「民」が早くもその「契約」の条件である『十戒』のうちの「他の何ものをも神としてはならない」という第一戒律と、「自分のために刻んだ像を造ってはならない」という第二戒律とを完全に破棄してしまっていたのである。

そこで、「神」はモーセに言った、「わたしは、この民の正体を見た」「この民は不誠実である。彼らは契約の相

手とする価値がない」「その故に、わたしの方でも、この契約は破棄する。」

「主はまたモーセに言われた、『わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう。』」

モーセはその神、主をなだめて言った、「主よ、大いなる力と強き手をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか。どうしてエジプトびとに『彼は悪意をもって彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいのでしょうか。どうかあなたの激しい怒りをやめ、あなたの民に下そうとされるこの災を思い直し、あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこの地を皆あなたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであろう』と彼らに仰せられたことを覚えてください。」

それで、主はその民に下すと言われた災について思い直された。▽

(出エジプト記三二—九)

「神」をなだめる人間も人間であるが、人間になだめられて、すぐ怒りを納め、思い直す「神」も「神」である。

モーセは、早速、「契約」の条件に違反したその「民」の所へ走り下った。何故なら——このままでは、地上におけるモーセの支配権が、アロンによって取ってかわられることになるからである。「モーセこそが地上における「民」の主なのであつた。」

「モーセは身を転じて山を下った。彼の手には、かの二枚のあかしの板があつた。板はその両面に文字があつ

た。すなわち、この面にも、かの面にも文字があった。その板は神の作、その文字は神の文字であって、板に彫ったものである。

ヨシユアは民の呼ばれる声を聞いて、モーセに言った、「宿営の中に戦いの声がします。」

しかし、モーセは言った、「勝ちどきの声ではなく、敗北の叫び声でもない。わたしの聞くのは歌の声である。」

モーセが宿営に近づくと、子牛と踊りとを見たので、彼は怒りに燃え、手からかの板を投げうち、これを山のふもとで砕いた。

また彼らが造った子牛を取って火に焼き、こなごなに砕き、これを水の上にまいて、イスラエルの人々に飲ませた。▽
(出エジプト記三二―15)

『金の子牛』の前で讚美歌を唄い、踊り狂っているイスラエルの民に向って、「神自身はもう思い直しているというのに、」今度はモーセが激怒して、あの『神の作品』、「あかしの板」を投げうち、それをこなごなに砕いてしまった。

そして、モーセのこの行為によって、イスラエルが『神の選民』であるという証拠も、「カナンの地」がイスラエルの民に与えられたものであるという証拠も完全に消滅してしまったのであった。

△モーセはアロンに言った、「この民があなたに何をしたので、あなたは彼らに大いなる罪を犯させたのですか。」

アロンは言った、「わが主よ、激しく怒らないでください。この民の悪いのはあなたがごぞんじです。彼ら

はわたしに言いました、『わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造って下さい。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセはどうなったのかわからないからです。』そこでわたしは『だれでも金を持っている者は、それを取りはずしなさい』と彼らに言いました。彼らはそれをわたしに渡したので、わたしがこれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです。』

(出エジプト記三二―21)

『工具で型を造り、鑄て子牛とした』アロンが、このように「嘘」を言って、罪をイスラエルの「民」に押しつけた。

△モーセは宿營の門に立って言った、「すべて主につく者は、わたしのものにきなさい。」

レビの子たちはみな彼のもとに集った。

そこでモーセは彼らに言った、「イスラエルの神、主はこう言われる、『あなたがたはおのおの腰につるぎを帯び、宿營の中を門から門へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ。』」

レビの子たちはモーセの言葉通りにしたので、その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。そこで、モーセは言った、「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆って、きょう、主に身をささげた。それで主は、きょう、あなたがたに祝福を与えられるであらう。』

(出エジプト記三二―26)

ここではあの『十戒』のうちの「殺してはならない」という第六戒律が破られている。

しかも、「殺すな」というその戒律を破って、その「兄弟」、その「友人」、その「隣人」を殺した者たちが、逆に、「主」によって「祝福」されている。

そして、この日、モーセの言葉通りに兄弟や友人や隣人を殺したので、これら「レビの子」(レビ部族の者)たちは、その後「レビ人」と呼ばれ、『イスラエル人の中のイスラエル人』として、「選民中の選民」として、『聖なる部族』として、他の部族とは違った取扱いを受けることになるのである。

しかし、このように自分の兄弟や、友人や、隣人を殺すことが、「主の祝福」を受けるゆえんであるとしたら、あのモーセの『十戒』にいうところの「殺してはならない」という第六戒律はいい何なのであろうか。――△律法とは何であつたか。▽

しかも――「その金の小牛は、アロンが造つたものである」ときめつけられていながら(出エジプト記三二―35)、そのアロンは殺されなかつたのである――△律法とは何であつたか。▽

このことについて、あの女流評論家は次のように書いている。

「司祭の職に選ばれて、聖別さるべきアロンが、責めを民におしつけて、偶像礼拝を許していた。モイゼは再び怒りに燃えた。一族全員司祭の族とされるはずの、レヴィの男子たちに向つて呼ばわつた。『腰に剣を。剣の柄に手をかけよ。幕屋から幕屋をへめぐつて、牛を拜んだ者を斃して歩け。兄は弟を、弟は兄を、友は友を、隣人は隣人を容赦なく突き殺せ。刺し殺せ。』レヴィの子たちは命じられたままに剣を取つて幕屋をめぐつた。悲痛の叫びが至るところで日暮れどきまで響き渡つた。剣に貫かれた者は三千人。『血肉よりも神を。血肉を創造りたもうた神の掟を。レヴィの子らよ、義人たちよ』とモイゼは賞めた」(「犬飼道子「旧約聖書物語」(前掲)一〇〇頁」)。

彼女は、この殺人者たちを『義人たちよ』と呼んで激賞しているけれども、その『神の掟』によれば「殺してはならない」はずではなかつたのか。

かのユダヤ教の「ラビ」△律法学者▽もまた、「殺してはならない」というこの「戒律」について、次のように書いている。

「この十戒の一つにある『殺す』ということばは、英訳では『キル』となっているが、ヘブライ語では『レツツァ』である。これは英訳では『マードー』でなければならぬ。英語の『キル』は、ヘブライ語の『ハーロツグ』に当たり、これは、どろぼうが入ってきて、自分を殺しそうになったので、正当防衛でやむを得ず殺したといったような、何らかの理由があつて殺したときに使われることばである。ヘブライ語の『レツツァ』というのは、理由もなく故意に人を殺す、つまりよこしまな殺し方、犯罪的な殺し方をする場合に使われる。十戒はこの『レツツァ』に当たる殺人をしてはならないといっている。したがって、戦争でやむを得ず人を殺すことは許されるが、ナチス・ドイツの大量殺人やテル・アビブ空港の乱射事件のように理由もなく罪なき人を殺すのは、明らかに『殺人者——レツツァ』なのであつて、これは絶対に禁じられている。日本語では『殺す』ということばだけが、この二つは嚴重に區別されなければならない。」〔M・トケイヤー著・加瀬英明訳「ユダヤ発想の驚異——旧約聖書の英知と教え——」(前掲)一三〇頁〕

しかし、『存在』△有りて有る者▽という名の神が、人間の「存在」を抹殺する行為を許すはずがない。人間は、他の人間を殺してはならないし、他の人間に殺されてもならない。また、第三者が殺されるのを黙認してはならないはずである。

如何なる人間にも他の人間の「存在」を抹殺する権利△殺人権▽はない。

従つて、逆に如何なる人間にも、他の人間によって自己の「存在」を抹殺されることから自己を守る権利△自衛権▽（正当防衛権）があるはずである。

そして、その「自衛権」の行使によって、たまたま「殺そうとする者」が死ぬ場合があったとしても、それは、彼自身が死への道を選んで死んだのであって、殺したことにはならない。

およそ人間が人間を殺すことを、その理由の如何を問わず全面的に禁止するものでなければ、人間的な意味での「殺してはならない」という「戒律」にはならない。

あのモーセの『十戒』にその起源を持つところの現代の西洋文明における「法律」(律法)なるものには倫理性が欠けているというのはそのことなのである。

『イスラエルの軍団』に属する『選民』は、『義人たち』であり、その「血統」のゆえに、『非選民』(賤民)を殺す権利があるのだなどという理論では、『ヒットラーの軍団』に属する『選民』には、その血統のゆえに、『非選民』(賤民)を殺す権利があるのだというあの狂気の思想を地上から永久に葬り去ることは出来ない。

(5) 角がある人

「モーセ」とは誰か。

「モーセ」という名そのものが、彼が「エジプト人」であったという有力な証拠を提供してくれる。

実に、「モーセ」という名は、「ヘブル人」の名ではなく、「エジプト人」の名なのである。

エジプトには、——しかも、「モーセの時代」と推定されている第十九王朝から第二十王朝の時代に——「ラー・モイセ」という名の王が十一人もいる。

ヘブル人たちの「エジプト脱出」(「出エジプト」)に最も関係が深いと推定されているエジプトの王は第十九王朝

の「ラメセス二世」であるが、この「ラメセス」（ラメス）という名を分析すると、「ラー」プラス「モーセ」になる。エジプトの太陽神「ラー」に、「……の子」という意味の「モセス」という語が連なった「ラーの子」・「日神の子」というのが、「ラー・モセス」＝「ラメセス」というこの王の名になっているのである。

しかし、あの『イスラエル碑文』との比較から、ラメセス二世では時代が遅すぎるというのなら、更にそれより二百年も以前の第十八王朝には「トト・モーセ」という名の王が四人もいる。

特に、「トトメス三世」（在位 B. C. 1502-1448）は十七回も北方遠征を行い、ユーフラテス河上流にまで到達しているのであるが、この王の名は、——エジプトの月神「トト」に、「……の子」という意味の「モセス」が連つて、「トトの子」・「月神の子」というのが「トト・モセス」＝「トトメス」という王名となっているわけである。

そこで、このモーセなる人物もまた、実は、□□・モセスという名のエジプト王族の一人であつて、彼が「イスラエル人」をその軍団に従つて、エジプトの地から導き出した」（出エジプト記六—26）。つまりヘブル奴隸たちを「傭兵」として採用し、軍団を編成して、「エジプトの地」から「カナンの地」への遠征を試みたのだという『仮説』も必しも非現実的なことではない。

しかし、モーセと共にエジプトの地を脱出した「主の軍団」が「女と子供を除いて徒歩の男子は約六、十万人であつた」（出エジプト記一二—37）などということは、とうていあり得ない。

モーセの誕生以前に、エジプトの王が「ヘブル人に男の子が生れたら、みなナイル河に投げ込んで殺してしまえ」という布告を出しているのだから、その徒歩の「男子」「六十万人」は、みな八十歳以上の老人であつたとも言うのであろうか。

しかも、そうではないということを聖典そのものが証言しているのである。——エジプトを脱出した翌年の二月一日に、シナイの荒野でモーセとアロンがこの「軍団」の二十歳以上の男子を数え上げたところ、その数は「六十万三千五百五十人」であった。しかも、この中にはレビ部族の者は含まれていない。

そして、その時の人口調査によれば、レビ部族の生後一か月以上の男子は「二万二千人」であり、更にそのうちで三十歳以上五十歳以下の男子の数は「八千五百八十人」であった(民数記四—48)———というのであるから、レビ部族以外の「六十万三千五百五十人」の男子は、みな八十歳以上の老人であったと仮定しても、少くともこの「八千五百八十人」の男子だけは、みなナイル河から拾い上げられたものだとせねばならない。

その上、「水の中から引き出したのだからモーセと名づけた」(出エジプト記二—10)というあのモーセの「誕生物語」そのもので、実は、△メソポタミア▽原種のものである。

あの「バビロン」の支配者であった「アッカド王国」(B. C. 2350-2150?)のサルマン一世(B. C. 2350-2294?)の誕生物語——貧しい母によってひそかに生み落された後、アスファルトを塗ったバビロスの籠△箱舟▽に入れられて、ユーフラテス河に流されたが、すぐに身分の尊い女性に拾い上げられて育てられたというあの物語とこれが瓜二つであることを考慮に入れると、エジプトの王が「ヘブル人に男の子が生れたら、すべてナイル河に投げ込んで殺してしまえ」という布告を出したという話そのものが架空のことであったとせねばならないのである。

そこで、実は、□□・モセスという名のエジプト王族の一人が、エジプト国内ではその志を得られなくて「叛乱」を起し、追われて、ミデヤンの地に逃れ、「祭司」エテロにかくまわれている間に、各地からヘブル人の「傭兵」を募集し、「神の山」の前で「カナン遠征部隊」(イスラエル軍団)を編成したのだという『仮説』も必しも非現実的

なことではないということになる。

□□・モセス王は、「傭兵」であるヘブル人たちに対して、『この遠征が成功したら、あのカナンの地で、お前たちに土地を分け与えてやる』と約束へ契約した。

あの乳と蜜が流れているというカナンの地で「嗣業の地」（私有地）を得られると思って、ヘブル人へ土地を持たぬ者へたちは勇み立ったのであった。

「十戒」の初めに「おまえたちをエジプトでの奴隷の地位から解放してやったのは、わたしである。わたしこそ、おまえたちの主人である。おまえたちは、わたしの他に、何者をも主人としてそれに仕えてはならない」とヘブル人たちの集団に対して嚴重に戒告しているのは、「神」ではなく、モーセなのである。

モーセこそ「主」（支配者）なのである。

それは矢張り相対的な「人間」（モーセ）と「人間」（ヘブル人たち）との間の「契約」なのであって、「神」と「人間」との間の「契約」ではなかった。

「それは、神がおまえたちに約束されたことだ」と言って、モーセが「神」の權威を利用したにすぎない。

そして、そのことは、実は聖典の中で、次のような形で暗示されているのである。

第一回目の「あかしの板」は、「神が指をもって」書いたもので（出エジプト記三二―18）、「その板は神の作、その文字は神の文字」であったが（出エジプト記三二―16）、第二回目の「あかしの板」、つまり現にヘブル人たちが見た石板は、神が書いたものではなく、モーセが書いたものであった（出エジプト記三四―28）。

へ律法へそれは、まさにパウロがいみじくも述べているように「仲介者の手によって制定されたものであるにすぎ

ない」(ガラテヤ人への手紙三―19)。

『律法』とは、「神」と「民」との中間に介在する「仲介者」の手で制定されたものであるにすぎない。

そして実はこれが現代の西洋文明における「法律」の本質なのである。

あの石板が「神」から授けられたあかしの板と言われながら、その上に書かれている『十戒』が、「神の十戒」ではなく、『モーセの十戒』と呼ばれているゆえんは、それが文字通り「モーセの十戒」であり、「モーセによる十戒」であり、そして、「モーセのための十戒」だったからである。

あの『あかしの板』の上に書かれていたという土地分配契約の言葉は、実は、『神と民との間の契約』ではなくて、まさに『モーセと民との間の契約』なのであり、『モーセによる契約』であり、『モーセのための契約』なのであった。

それは、「モーセ」と「民」との間の傭兵契約なのであった。

ヤコブ(イスラエル)の十二人の子供の名にちなんで、十二部族(十二軍団)に編成されていたというこのハヤコブ一家の『主の軍団』なるものは、まさに「モーセの軍団」であり、「モーセによる軍団」であり、「モーセのための軍団」なのであった。

△律法の中の律法と言われているあの『モーセの十戒』なるものは、「主」(モーセ)がこのヘブル人たちの「傭兵集団」を統率してゆくために作った「軍律」だったのである。

従って、「殺してはならない」という第六戒律があっても、モーセにとつて、「主」にとつて、「支配者」にとつて、それが必要なら何時でも「兄弟」でも、「隣人」でも、「友人」でも、何のちゅうちよもなく殺してしまうこと

が、「主」（支配者）のお目にかなうことであり、「主の祝福」を受ける行為となるのである。

モーセの『十戒』を道徳的な戒律であると評価するのは間違っている。

現代の西洋文明における「法律」とはそういうものである。——戦時に「敵」を多く殺した者には、「主」の特別の恩恵（勲章）が与えられるし、また現に、平時でも「死刑執行人」には、「主」の特別の恩恵（報酬）が与えられているのである。

また、このモーセの『十戒』を礼讃して「これこそ、文明国家の完全な犯罪目録である」と説く者がいる。

しかし、それは完全な犯罪目録ではない。何故なら、そこには「詐欺罪」が存在しないからである。

モーセの『十戒』からは、「嘘をついてはならない」という重要な項目が欠落している。

この『契約の民』イスラエル人たちにとっては、「嘘」をつくことは犯罪にはならないのであった——アロンは殺されなかった。

／＼さて、主はモーセに言われた、「あなたと、あなたがエジプトから導きのぼった民とは、ここを立つてわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓って、『これをあなたの子孫に与える』と言った地にのぼりなさい。わたしはひとりの使をつかわしてあなたに先立たせ、カナンびと、アモリびと、ヘテびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとを追い払うであろう。あなたがたは乳と蜜の流れる地にのぼりなさい。しかし、あなたがたは、かたくなな民であるから、わたしが道であなただを滅ぼすことのないように、あなたがたのうちにあって、一緒にはのぼらないであろう。」

（出エジプト記三三—一）

「神」に「一緒には行かない」と宣言されて、不安に思ったモーセは、せめて「神」の『顔』を見たいと願いだした

のであったが、「神」はすげなくその願いを拒絶した。

△モーセは言った、「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示し下さい。」主は言われた、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ、主の名をあなたの前にのべるであろう。わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれむ。」

また言われた、「しかし、あなたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている人はないからである。」

そして主は言われた、「見よ、わたしのかたわらに一つの所がある。あなたは岩の上に立ちなさい。わたしの栄光がそこを通り過ぎるとき、わたしはあなたを岩の裂け目に入れて、わたしが通り過ぎるまで、手であな
たをおおうであろう。そしてわたしが手をのけると、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は見
ないであろう。」▽
(出エジプト記三三—18)

その「神」は、モーセに対してさえも、その『後姿』しか見せなかった。

その顔は、実は、「ケニ人」の顔であつたかも知れない——「エテロである」という証拠はないが、「エテロではない」という証拠もないのである。

何故なら、誰も正面切つてその『素顔』を見た者はいないのだからである。

△主はモーセに言われた、「あなたは前のような石の板二枚を、切つて造りなさい。わたしはあなたが砕いた初めの板にあつた言葉を、その板に書くであろう。あなたは朝までに備えをし、朝のうちにシナイ山に登つて、山の頂でわたしの前に立ちなさい。だれもあなたと共に登つてはならない。また、だれも山の中にいてはなら

ない。また山の前で羊や牛を飼っていてはならない。」▽

(出エジプト記三四―1)

そこで、モーセは「神」との第二回目の「契約」を締結するために石板二枚を持ってシナイ山へ登って行った。

△また主はモーセに言われた、「これらの言葉を書きしるしなさい。わたしはこれらの言葉に基いて、あなたおよびイスラエルと契約を結んだからである。」モーセは主と共に四十日四十夜、そこにいたが、パンも食わず、水も飲まなかった。そして彼は、契約の言葉、十戒を板の上に書いた。

モーセはそのあかしの板二枚を手にしてシナイ山から下ったが、その山を下ったとき、モーセは、さきに主と語ったゆえに、顔の皮が光を放っているのを知らなかった。アロンとイスラエルの人々とがみな、モーセを見ると、彼の顔の皮が光を放っていたので、彼らは恐れてこれに近づかなかった。

モーセは彼らを呼んだ。アロンと会衆のかしらたちとがみな、モーセのもとに帰ってきたので、モーセは彼らと語った。

その後、イスラエルの人々がみな近よったので、モーセは主がシナイ山で彼に語られたことを、ことごとく彼らにさとした。▽
(出エジプト記三四―27)

さて、ここに顔の皮が「光を放っていた」というのは誤訳であって、顔の皮から「角が生えていた」と訳すべきところである。

モーセが「神」と語って山を下りて来た時に、彼の頭に「角」が生えていたのでアロンもイスラエル人たちも「鬼」かと恐れて近づかなかったというのである。

△モーセは彼らと語り終えた時、顔をおいを顔に当てた。しかしモーセは主の前に行って主と語る時は、出る

まで顔おおいを取り除いていた。そして出て来ると、その命じられた事をイスラエルの人々に告げた。イスラエルの人々はモーセの顔を見ると、モーセの顔の皮が光を放っていた。モーセは行って主と語るまで、また顔おおいを顔に当てた。▽

(出エジプト記三四—33)

この部分の最初の「モーセは彼らと語り終えた時、顔おおいを顔に当てた」というのは、その前の部分で「顔の皮が光を放っていた」と誤訳しているのでそれと辻つまを合わせるために再び誤訳が行われたのであり、その結果、その意味は不明瞭になってしまっている。

「モーセは彼らと語る時、顔おおいを顔に当てた」というのがこの部分の原形であるはずである。

モーセは山上で「神」と語る時以外は、常に『覆面』をしていたのである。

そのことについては、あの女流評論家も次のように書いている。

「しかし神の顔は見なくても、神の威光を物語る火と雲を見つづけたモーゼの顔は、四十日四十夜ののち、光り輝く顔となった。その輝きはイスラエルの子らの目にはあまりにもまばゆくて、人々は山を降りて来たモーゼをまともに見ることは出来なかった。モーゼの顔には布で作った覆面がかけられねばならなかった」〔大綱道子「旧約聖書物語」

(前掲) 一〇一頁〕。

モーセは——パウロがいみじくも述べているように「イスラエルの子らに見られまいとして、顔におおいをかけていた」のであった(コリント人への第二の手紙三—13)。

日本にも、『角がある人』(都怒我阿羅斯等)が、崇神天皇の時代に敦賀に流れ着いたという記録がある(日本書紀・第六卷)。

それを根拠にして『モーセが日本に渡来した』とか、『アレクサンダー大王が日本に渡来した』とかいう新説を主張することも出来る。

有名なエジプトのプトレマイオス王朝 (B. C. 323-A. D. 30) のコインには、「角の生えたアレクサンダー大王」(在位 B. C. 336-323) の横顔がぎやまれている。

従って、モーセがその「権威」の象徴として、——それは多分、「兜」の一種なのだが——その額に『角』を生やしていても、少しも不思議なことではない。

「そして、それは多分、あの山伏の「兜巾」に関係があるものと推定される。」

しかし、アレクサンダー大王は、決して『覆面』をしてはいなかった。それなのに、何故、モーセは何時も『覆面』をしていて、イスラエル人たちにその『素顔』を見せなかったのか——。

イスラエルの「神」が、誰にもその『素顔』を見せなかったように——まさにそのように、モーセもまた、イスラエルの「民」に対しては、決してその『素顔』を見せたことのない「主」——「支配者」であったのである。

第三節 レビ記

(1) 祭司

「主はモーセに言われた、「正月の元日にあなたは会見の天幕なる幕屋を建てなければならない。そして、その中にあかしの箱を置き、垂幕で、箱を隔て隠し、また、机を携え入れ、それに並べるものを並べ、燭台を携え入れて、そのともしびをともしなければならない。」」

(出エジプト記四〇—一)

ここに、あかしの箱といっているのは、モーセの『十戒』と、『契約の言葉』とを書いたあの石板がその中に納められている箱のことであり、すべての祭儀はこの箱——△契約の箱▽又は「神の箱」——を中心にして行われたのである。

『出エジプト記』の第三十五章から第四十章にかけて記載されている祭儀関係の「律法」に引き続き、『レビ記』もまた、その最初の「主はモーセを呼び、会見の幕屋からこれに告げて言われた」(レビ記一—1)から、最後の「これは主が、シナイ山で、イスラエルの人々のために、モーセに命じられた戒律である」(レビ記二七—34)までのほとんどすべてが祭儀関係の「律法」で構成されている。

そして、その祭儀を司る者が「祭司」であり、それはアロンの子らの世襲的職務とされていた。

あの日、腰に剣を帯びてイスラエルの宿営の中を門から門へと行き巡り、「おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ」という「主」(モーセ)の言葉どおりにしたので(出エジプト記三二—28)、「主」の御目にかない、「主」に祝福された——『聖なる部族』——「レビ部族」(レビ人)の中から、更に選ばれて、アロンとその子たちがこの聖職を世襲することになったのである。

△アロンとその子たちを会見の幕屋の入口に連れてきて、水で彼らを洗い、アロンに聖なる服を着せ、これに油を注いで聖別し、祭司の務をさせなければならぬ。また彼の子たちを連れてきて、これに服を着せ、その父に油を注いだように、彼らにも油を注いで、祭司の務をさせなければならぬ。彼らが油をそそがれることは、代々ながく祭司職のためになすべきことである。▽

(出エジプト記四〇—12)

アロンとその子たちは皆『油注がれた祭司』△メシヤ▽と呼ばれている(レビ記四—3)。

「メシヤ」＝「キリスト」（「受膏者」）というのは、「神によってその頭に油を注がれて聖別された者」という意味であり、このようにして、アロンとその子たちが「キリスト」だったのである。

「キリスト」は、「ダビデの家」（ユダ部族）からではなくて、「アロンの家」（レビ部族）から出たのである。」

／＼アロンは民にむかつて手をあげて、彼らを祝福し、罪祭、燔祭、酬恩祭をささげ終って降りました。

モーセとアロンは会見の幕屋に入り、また出てきて民を祝福した。

そして主の栄光はすべての民に現れ、主の前から火が出て、祭壇の上の燔祭と脂肪とを焼きつくした。民はみな、これを見て喜びよばわり、そしてひれ伏した。▽
(レビ記九―22)

モーセが実は覆面をした「エジプト人」であったとしても、イスラエル人たちが彼以外の者を「主人」（支配者）として、それに仕えない限りは、彼は安全なのであった。

モーセの『十戒』のうちの第一戒律「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」というのは、そのことなのである。

「そして、その「神」を「ねたむ神」に仕立てたのもまた、ねたみ深いこの「主」（モーセ）のせいなのである。」その上更に、その「神」がモーセだけのものではあれば、彼は一層安全なのであった。

モーセにとっては、神を「独占」することが必要なのであり、「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない」というあの第二戒律も、第三戒律の「あなたはあなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない」も、共にその意味でここに置かれているのである。

しかし、このモーセの神への「独占体制」を脅かすことの出来る者が存在した。

それは、彼の「兄」アロンと彼の「姉」ミリアムとである。

彼らは、神の名を唱えて、神を呼び出すことの出来る「預言者」なのであった。

「しかも、アロンには、「ナダブ」・「アビフ」・「エレアザル」・「イタマル」という四人の後継者があった。」

△さてアロンの子ナダブとアビフとは、おのおのその香炉を取って火をこれに入れ、薫香をその上に盛って、異火を主の前にささげた。

これは主の命令に反することであつたので、主の前から火が出て彼らを焼き滅ぼし、彼らは主の前に死んだ。その時モーセはアロンに言った、「主は、こう仰せられた。すなわち『わたしは、わたしに近づく者のうちに、わたしの聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現すであらう。』」

アロンは黙っていた。

(レビ記一〇—一)

「異火」とは、いったい何であつたのかは不明であるが、もしも、モーセの父とモーセだけが△燃える水▽(石油)を知っていたのだとしたら、あの聖なる山での「燃える芝」(出エジプト記三—二)以来の『火炎の魔術』の「種」はそれである。

このようにして、その「長男」と「次男」とを焼き殺されても、アロンは、結局は「沈黙」を守った。

△モーセはアロンの叔父ウジエルの子ミシヤエルとエルザパンとを呼び寄せて彼らに言った、「近寄って、あなたがたの兄弟たちを聖所の前から、宿営の外に運び出さない。」

彼らは近寄って、彼らをその服のまま宿営の外に運び出し、モーセの言つたようにした。

モーセはまたアロンおよびその子エレアザルとイタマルと言つた、「あなたがたは髪の毛を乱し、また衣

服を裂いてはならない。あなたがたが死ぬことのないため、また主の怒りが、すべての会衆に及ぶことのないためである。

ただし、あなたがたの兄弟イスラエルの全家は、主が火をもって焼き滅ぼしたもうたことを嘆いてよい。

また、あなたがたは死ぬことのないように、会見の幕屋の入口から外へ出てはならない。あなたがたの上に主の注ぎ油があるからである。」

彼らはモーセの言葉のとおりにした。▽

(レビ記二〇—四)

モーセは、アロンと、エレアザルと、イタマルとが殺されたナダブとアビフのために嘆き悲しむを見て、他のイスラエル人たちが怒ってモーセへの叛乱を引き起すのを防止するために、彼ら三人が幕屋から外へ出ることを禁止した。

そして、アロンも、エレアザルも、イタマルも「死ぬことのないように」——モーセの『火炎の魔術』によって焼き殺されることのないように——モーセの言葉通りにした。モーセは完全な「独裁者」だったのである。

△さてモーセは罪祭のやぎを、ていねに捜したが、見よ、それがすでに焼かれていたので、彼は残っているアロンの子エレアザルとイタマルとにむかい、怒って言った、「あなたがたは、なぜ罪祭のものを聖なる所で食べなかったのか。これはいと聖なる物であって、あなたがたが会衆の罪を負って、彼らのために主の前にあがないをするため、あなたがたに賜わった物である。見よ、その血は聖所の中に携え入れなかった。その肉はわたいが命じたように、あなたがたは必ずそれを聖なる所で食べるべきであった。」

アロンはモーセに言った、「見よ、きよう、彼らはその罪祭と燔祭とを主の前にささげたが、このような事

がわたしに臨んだ。もしわたしが、きよう罪祭のものを食べたとしたら、主はこれを良しとせられたであろうか。」

モーセはこれを聞いて、良いといった。▽

(レビ記一〇—16)

今度も、モーセが、「三男」エレアザルと「四男」イタマルとを威嚇したのであったが、——アロンはただ何ごとかを口の中でつぶやいただけであった。

(2) アザゼルとモレク

△アロンはまた二頭のやぎを取り、それを会見の幕屋の入口で主の前に立たせ、その二頭のやぎのために、くじを引かなければならない。すなわち一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのためである。

そしてアロンは主のためのくじに当ったやぎをささげて、これを罪祭としなければならない。

しかし、アザゼルのためのくじに当ったやぎは、主の前に生かしておき、これをもって、あがないをなし、これをアザゼルのために、荒野に送らなければならない。▽
(レビ記一六—7)

ユダヤ教では絶対唯一神「ヤハウェ」の他に神の「存在」を認めない。

しかし、イスラエルの「神」は、拝一神教の「神」であったということをこれまでしばしば述べて来た。

しかも、「イスラエル教徒」(イスラエル人)は、「拝一神教徒」であるというよりは、むしろ「多神教徒」なのであった。

何故ならば、ここでは、「主のための山羊」と、「アザゼルのための山羊」と、二頭の山羊が用意され、しかも、

この「二頭の山羊」は、同価値のものであり、どちらを「主」に捧げ、どちらを「アザゼル」に捧げるかは、その日に会見の幕屋の入口で祭司アロンが「くじ」を引いてきめるというのであるから、この双方の「神」は、対等の神なのである。

更にまた、この「アザゼル」の他にも、「モレク」という名の神があつて、広く礼拝されていたことも知られている（列王紀・下二三—10）（エレミヤ書三一—35）。

ハイスエルの人々のうち、またイスラエルのうちに寄留する他国人のうち、だれでもその子供をモレクにささげる者は、必ず殺されなければならない。すなわち国の民は彼を石で撃たなければならない。わたしは顔をその人に向け、彼を民のうちから断つであらう。彼がその子供をモレクにささげてわたしの聖所を汚し、またわたしの聖なる名を汚したからである。▽

（レビ記二〇—2）

そして、自分の子供を犠牲として焼き殺すというこの「モレク」への信仰は、あのアブラハムがイサクを燔祭の犠牲に供しようとしたことにも関係があるはずである。

そのことについて、あの女流評論家は次のように書いている。

「道中も彼は悩みつづけた。神の計りがたい意思について考えつづけた。胸は悲哀に溢れ、唇は固く閉ざされたままだった。人身御供^{ひとみごくう}、わが子供供^{こごくう}は、いまだ開けない時代のカナアンからメソポタミア一帯の地にかけて、少しもめずらしい習慣ではなかったのである。人々は願望の成就のために、また偶像を『喜ばせるために』最も大切な宝、すなわちわが子を、屠って祭壇にそなえることを行っていた。だからアブラハムにとって、神の命令は、それほど、野蛮残忍とは聞えなかった」（『大飼道子「旧約聖書物語」（前掲）三〇頁）。

〔未完〕